

ミルトンの再生観

杉本 誠

ミルトンは『キリスト教教義論』の「再生」の章で、「再生とは、神のことばと聖霊の力によって、古い人が滅ぼされ、内的人間が、知性においても、意志においても、生まれ変わらされることである」⁽¹⁾と述べている。さらに、再生とは、「人が新しい人間となり、肉体においても、魂においても、全く聖なるものとされ、神に仕え、よきわざを行なう者となることである」⁽²⁾と言う。そこで小論では、このミルトンのキリスト教的再生観が『失樂園』におけるアダムの子の再生の過程と、『闘技士サムソン』におけるサムソンの再生の過程にどのように反映されているかを検討してみたい。アダムの子の再生に関しては、「信仰」と「愛」という視点から検討し、サムソンにおいては、「信仰」と「忍耐」の視点から整理してみることにする。

ティリヤードは『失樂園』第10巻の初めにおいて、キリストがアダムとエバに裁きを下すと同時に、二人をあわれんで衣を着せてやるところで、この墮落した二人の子の再生の過程がすでに始まることを指摘している。⁽³⁾確かにキリストのこのあわれみがなければ、墮落した二人の子は再生に向かうことはできない。しかし、まだキリストによる贖罪を知らない人間が、自分なりの努力でお互いに和解し、そこから二人で神に赦しを乞う気持になっている点にも注意をしたい。

アダムとエバの和解は、『失樂園』の真のクライマックスであるとティリヤードが言うほど、それは美しいものであるが、もちろん、二人が和解しただけでは、彼らの愛は在るべき状態に回復したとは言えない。いったん墮落した人間の愛は、それが或る瞬間にどれほど真実で美しいものであっても、霊的に神から離れている限り、直ちに肉的な情熱に支配され、彼らの愛が相互の非難と憎しみに変わることは、彼らが経験によって学んだところである。人間を超える、より大きな力が彼らに働かなければ、もっと正確に言えば、より大きな力が彼らに働いていることを知り、それに彼らが応えるのでなければ、墮ちた人間は同じことを無限に繰り返して、そこから回復する望みを持つことはできないであろう。つまり、神への従順を抜きにした人間の愛は、必ず破綻をきたすということである。それゆえに神は、人がその自由意志をもって罪の状態から立ち直り、神と人への愛を回復することができるように、恵み (grace) を送るのである。

アダムが「先行する恵み」(Prevenient grace XI, 3)の力によって祈る場面は、第10巻の終わりで、次のように描写される。

What better can we do, than to the place
 Repairing where he judged us, prostrate fall
 Before him reverent, and there confess
 Humbly our faults, and pardon beg, with tears
 Watering the ground, and with our sighs the air
 Frequenting, sent from hearts contrite, in sign
 Of sorrow unfeigned, and humiliation meek. (X, 1086-92)

われわれにできる最善のことと言えば、
 神がわれわれを裁かれたところへ戻り、
 うやうやしく神の御前にひれ伏し、そこで謙虚に
 自らの罪を告白して赦しを乞い、偽りのない
 悔悛と柔和な謙遜のしるしに、
 悔いた心から出る二人の涙で地面をうるおし、
 二人の溜息で大気を満たすことではないだろうか。

アダムの神の愛とあわれみについての理解の深まり、とりわけ、それらが神の裁きの中にこそ示されるという理解の深まりと共に、彼は真に再生された人間へと変わってゆく。

Undoubtedly he will relent and turn
 From his displeasure ; in whose look serene,
 When angry most he seemed and most severe,
 What else but favour, grace, and mercy shone? (X, 1093-96)

神は疑いもなく、御心をやわらげ、不機嫌を
 なおされるだろう。神はどんなに激しく怒り、
 厳しく見える時でさえも、その静かな御顔には、
 ただ好意と恩恵とあわれみだけが輝いていたのではなかったか？

上述の、理解の深まりということは、‘Undoubtedly’という、アダムの神に対する強い信頼の気持を表わすことばを経て、最終の行において、一つのクライマックスに達するのである。

神への不従順を悔い改めたアダムとエバの二人の内面の転換は、第11巻冒頭に表現される。

Prevenient grace descending had removed
 The stony from their hearts, and made new flesh
 Regenerate grow instead, … (XI, 3-5)

人間の悔い改めに先行する恵みが降りて、
 彼らの心から石のような頑^{かたく}なさを取りのぞき、そのあとに
 再生の新しい肉を植えつけられた…

ここに「再生の」(‘Regenerate’)ということばが、作品全体で一度だけ出る。この「再生」という神学的概念に関して、『キリスト教教義論』の中で、ミルトンは次のように述べている。

人間を回生させようという神の意図は、その人に以前にも
 まして正しい判断力と自由意志を駆使する生まれながらの
 能力を回復させようとするばかりか、それは内なる人を
 新しいものとし、新しくされた人に神の力により新しい
 神的な能力を与えようとする。これが再生とか、キリストの
 接ぎ木とも呼ばれる過程なのである。⁽⁴⁾

つまり、再生の経験をもつ人間は、生まれながらの人間とは区別され、神にある新しい創造とされている。ミルトンはこの「再生」ということばを、『失樂園』においては、さきに引いた1箇所ではしか用いていない。だが、この重要なことばの意味は、別のことばで繰り返し表現されている。たとえばこの作品の第11巻及び第12巻に出てくる「目」ということばである。天使ミカエルはアダムの目から「薄膜」(film)を取り除き、アダムが真なるものを見ることのできるように導く。彼はアダムの「真の開眼者」(‘true opener’)なのである(第11巻412, 423, 429, 598, 711, 863行。第12巻274行)。これは使徒パウロが復活のキリストに会ったときに、彼の目から「うろこのようなものが落ちて、目が見えるようになった」(使徒の働き9章18節)と告白する、あの体験に相応する。アダムの場合、神の霊に会った結果、肉的視力を越える霊的眼力を与えられる経験を言うのである。「目が開く」ということは、「再生」の体験を言い表している文学的な表現である。こう考えてくると、『失樂園』第11巻と12巻のアダムとエバは、この段階で「再生」を体験しており、神から二人のところに遣わされた天使ミカエルによる未来史の啓示は、「知識」(knowledge)から「確信」(persuasion)に至るアダムの再生の過程のドラマ化であり、再生の深化とすることができよう。その意味で、ファウラーが言うように、第11巻及び12巻を「信仰」(faith)の段階を扱うものと解釈したい。⁽⁵⁾

さて、アダムは犯した罪のために直ちに死すべきものでありながら、「恵み」によって、多くの日々を生きることが赦される。そしてまた、彼は生きている間、悔い改めなければならない。それと同時に、犯した罪を信仰の行ないによって償わなければならない。

Sufficient that thy prayers are heard, and Death,
Then due by sentence when thou didst transgress,
Defeated of his seizure many days
Given thee of grace, wherein thou mayst repent,
And one bad act with many deeds well done
Mayst cover. (XI, 252-57)

お前の祈りは聞かれた。そして、お前が罪を犯した時、
宣告によって下されるはずであった死は、
恵みによってお前に与えられるしばらくの期間、
その力を奪われ、その間お前は悔い改め、
多くのよき行ないをもって、一つの悪しき行為を
償うことができるのだ。

信仰の行ないは、ミカエルが最後の訓戒（ⅩⅡ，575-87）の中で強くすすめるように、確信の段階に達して初めて可能となるものである。言い換えれば、それは最終的な「救いの信仰」(‘saving faith’)の段階に属するものである。「多くのよき行ない」とは、この一節が言及しているペテロ第一の手紙4章8節に「愛は多くの罪をおおうからです」と述べられている、その愛である。人の罪が赦されるために、神がミカエルを通して人に求めるのは、生涯にわたって罪を悔い改め、そして愛を実践することである。

ミカエルによる教育(‘instruction’)が完了し、アダムの回復のために必要な「正しい知識」が与えられたとき、彼はその回復の過程を「救いの信仰」の段階にまで至らせる。この段階に来て、ミカエルはアダムに対して「よき行ない」を行なうよう、明確に忠告する。

…only add

Deeds to thy knowledge answerable, add faith,
Add virtue, patience, temperance, add love,
By name to come called Charity, the soul
Of all the rest. (ⅩⅡ, 581-85)

ただ、

お前の知識に相応わしい行ないを加えよ。信仰、
徳、忍耐、節制を加えよ。とりわけ、他のすべてのものの
魂である、聖愛の名で呼ばれることになる
愛を加えよ。

知識に行ないを加えるということは、決して行為によって義とされるということではない。ミルトンが『キリスト教教義論』で説くように、人は信仰によって義とされるのであるが、ただそれは、行ないを伴う「生きた信仰」(a living faith)でなくてはならないということである。⁽⁶⁾ われわれはここで、行ないと信仰が並置され、共に、知識に加えるべきものとされていることに注意しなければならない。

信仰は、知識としての信仰に留まらず、それは「生きた信仰」、即ち、「信仰のわざ」(works of faith)にならなければならない、というのがミルトンの主張である。別の言い方をすれば、わざなしには、「生きた信仰」、「真の信仰」はあり得ない、ということである。⁽⁷⁾ そして、そのような信仰に生きることを可能にさせるのは、神の聖霊 (Spirit) である、とミルトンは言う。⁽⁸⁾ 従って、アダムは信仰者のうちに聖霊が具体的にどのように働くかを知らされ、そのことによって事実上、聖霊の恵みと導きを体験する者とならなければ、真に再生された人間になったことにはならない、と言えるのである。言い換えれば、アダムは聖霊の力によって「よきわざ」(good works)を行なうことのできる者とならなければならないのである。

ミルトンは、『キリスト教教義論』の 'Saving Faith' の章で、信仰とは、「神を受け入れ、神に近づくこと」(a receiving of God and an approach to God) である、と言っている。⁽⁹⁾ そして、神を受け入れ、神に近づくためには、まず、神についての正しい知識がなければならない。そして信仰は、ここから始まって善へと向かうものである。その意味で、信仰の座は知性ではなくて意志である、と述べている。⁽¹⁰⁾

Henceforth I learn, that to obey is best,
And love with fear the only God, walk
As in his presence, ever to observe
His providence, and on him sole depend,
Merciful over all his works, (XII, 561-65)

今後は、従うことは最善であり、
唯一の神を恐れをもって愛し、

常にその御前にあるがごとくに歩み
 絶えずその摂理を信じ、すべてのみわざに
 恵みをたもう神にのみ依り頼み、

アダムは、「神に従うこと」は「摂理を守ること」でもあり、それは「最善のこと」であると言っている。ここに見られるのは、神に対する絶対的な服従と、信頼と、依存の姿勢である。しかも、この部分を導入する‘Henceforth I learn’ということばに、それまでと違った、静かではあるが強い決意の調子を感じられる。これは、ミカエルへの質問を続けている段階のアダムではない。ここで、アダムは別の人間に生まれ変わっている。再生された人間になったのである。この箇所は、アダムが知性においてのみならず、意志においても生まれ変わったことを示すのである。従って、ティリヤードが、「再生の人間、即ち、その理性がキリストによって再び光を与えられた人間は、墮落以前の状態よりもすぐれた状態に達する」^[11]と言ったのは、きわめて正しい解釈である。アダムの再生は、ここで完成する。彼のこの最後の応答こそ、知恵の頂点（‘the sum of wisdom’）であるとミカエルは言う。知恵とは何か。ミルトンは『キリスト教教義論』の中で、知恵とは、われわれが神の御心を熱心に求めることである、と述べている。^[12] 知恵とは、単に、神の救いのわざについて知識を得ることではない。「神を受け入れ、神に近づくこと」を学ぶことである。これは、神から与えられる恵みに対して、「信仰」と「愛」をもって応答し、「よきわざ」に励むということである。ここにミルトンのピューリタンの行動性が認められる。

アダムが行ないを伴う生きた信仰をもって神に仕え、よきわざを行なうために要請されるのは「聖愛」(‘Charity’)の実践である。それは、いつ愛のないものに転落するかも知れない人間の愛でない。聖愛の実践とは、情熱を超える神的愛をもって、神と人とを愛することができるように、力の限り努力することである。その意味で、聖愛は目標であり、また希望である。墮落した人間にどうしてそれが可能であろうか。それはミカエルによって啓示されたキリストの模範に倣うことによってである。神を愛することがエバを愛することであるような愛を回復する道は、それしかない。そして、大切なことは、そのことによってのみ、アダムは真に回復した人間になってゆくのである。

さて、『闘技士サムソン』においてサムソンの再生の過程はどのように進められているのであろうか。サムソンにおける「信仰」と「忍耐」の視点から検討してみることにする。

ところで、『闘技士サムソン』の主題は、デイシスによれば「サムソンの再生の成りゆきである」^[13]としており、彼を訪れにやってくる人物一父マノア、妻デリラ、ペリシテの巨人ハラファ、それにペリシテの役人たちの誘惑に対し、「主人公サムソンがいかに闘い、再生していくかがこの劇の主題である」^[14]とみている。ティリヤードもサムソンの「再生」の過程を取り上げ、「再生は内面的な平安(‘inner peace’)から成る。サムソンは自分の最大の罪を知り、認める時にこそ平安と再生を見いだすことができた」^[15]と論じている。さらにステッドマンによれば、

「再生は内なる人に働いた変化であり、サムソンの霊的な変化における主要な強調である。サムソンの内なる霊的な再生は、全く英雄的な行動における重要な要素である」¹⁶⁶と指摘している。いずれにしても、この悲劇の有力な主題は主人公サムソンの霊的な「再生」への過程にあるのだと結論づけても過言ではない。

では、『闘技士サムソン』の中からサムソンの「再生」への過程をたどってみることにする。まず293-314行のコーラスを通して、この作品の主題とも言うべき「神の道は正しく、それは人間に正しいものである」(293-294行)ことが証しされる。ミルトンの王政復古当時の聖職者たちへの非難と憤りが表現されているのと同時に、「神は神意にかなう者をとくに選び」(311行)ということばの中に、ミルトンの「信仰」をくみとることができる。

サムソンにとって大きな悩み、恥、悲しみであり、魂の悶えであって眠られず、たえず物思いに悩むことは、異教の神ダゴンが崇拜され、イスラエルの唯一の神が汚され、不名誉と不面目を招き、神への不信と疑惑を招来したのは全て自らの弱さであり、責任であり、そのことが現在の恥辱と苦境へと追こまれた原因であると嘆く場面である(448-459行)。ステッドマンも「彼の苦難は、彼の信仰と忍耐を試すばかりでなく、悔い改めに導き、神にある新たにされた確信へと導く」¹⁶⁷と述べている。サムソンはこのような罪に倒れ、完全に力を失った状況の中で自らを救済して下さるのは、生けるイスラエルの神であり、神はペリシテの偶像の神ダゴンと一戦を交え、かならずや勝利を得るであろうという確信に満ちた「信仰」をもつに至る。このような信仰は、当然ミルトン自身の晩年における「信仰」でもあった。

父マノアはサムソンを身の代金で買い戻そうとするが、サムソンは買い戻されることは喜ばず、この際当然の形罰を甘んじて受け、男にもあるまじき「恥ずべきおしゃべりの罪」(491行)を償わしてくれと願う。彼にとっての願いは「速やかな死」(650行)であり、「死はすべての不幸の終末であり、慰め」(651行)であった。コーラスも絶望のサムソンを受けて、悩みに苦しむ人にとって「もし彼が心の中で、天からの慰めの源、彼の力を回復し、弱っていく精神を励ます秘かな活力を感じないなら」(663-665行)いくら人の心を慰めてくれる書物があったとしても、ほとんど説得力をもたないものだと言語。だが、なぜ神に選ばれた者が神のためにすべてを捧げたにもかかわらず、不幸な目にあい、試練を受けねばならないのかという疑問と懐疑を述べ、サムソンの哀れな姿を認め、彼の労働を静かに終わらせて下さいと願う(666-709行)。これらの行間には、王政復古のピューリタンの状況がにじみ出ていると同時に、ミルトンの「信仰」の試練を感じさせる場面でもある。

妻デリラは夫サムソンとの和解を求めにやって来るが、サムソンにとってはデリラは、すべての信義と誓約を破り、人を欺き、裏切り、偽りの悔恨をよそおい、心から後悔しているのではなく、夫を試すために来たと厳しくデリラを責める。デリラは墮落の原因が好奇心とせんさくづきから、秘密を知ると女心の弱さから口外したことを認め、サムソンに許しを乞うが受け入れられ

ない。誘惑者デリラは、さまざまな理屈や弁明をもってサムソンにせまるが、断固としてサムソンは「裏切り者」(725行)を退ける。

やがて、ゴリアテの父で、ペリシテの巨人ハラファが「傲慢な顔つきをして」(1068-1069行)登場し、サムソンの力を試そうと愚弄しながら、一騎打ちを申しこむ。ハラファとの対決において、サムソンが「私の信頼は生ける神にある」(1140行)という確信に立ちかえり、「神の最後の赦しを確信し、決して絶望していない」(1171行)と語る時に、彼は神との契約関係の持続を信じているのであったのである。従って、「私は決して私個人ではなかった」(1211行)ということばは、その証拠である。サムソンは「再生」し、彼の信仰はまさにミルトンの主に信頼する「信仰」となっている。

巨人ハラファが去った後のコーラスは、

O how comely it is and how reviving
To the spirits of just men long oppressed !
When God into the hands of their deliverer
Puts invincible might (1268-71)

長い圧力の下にいた正しい人々の精神にとって、
ああ何とそれはふさわしく、また生き返らせてくれるものであるか。
神が彼らの解放者の両手に
打ち勝ちがたい力を与える時には。

But patience is more oft the exercise
Of saints, the trial of their fortitude,
Making them each his own deliverer,
And victor over all
That tyranny or fortune can inflict,
Either of these is in thy lot,
Samson, with might endued
Above the sons of men; but sight bereaved
May chance to number thee with those
Whom patience finally must crown. (1287-96)

しかし、忍耐はそれ以上にしばしば聖徒たちの

試練であり、剛勇の訓練である。
 そして忍耐は彼らの各々を自らの解放者にし、
 また圧制か運命がもたらす
 すべてのものに打ち勝つ勝利者にする。
 このどちらかの運命が、おまえにある。
 人の子にまさる力を授けられたサムソンよ。
 だが、奪い取られた視力のせいで
 忍耐が最後に冠をかぶせてくれるにちがいない
 人々の数に、おまえは数えられることになるかも知れない。

神による長い間圧制下にいた心正しい人々の解放の賛歌と忍耐が、すべてのものに打ち勝つ勝利者とするサムソンに向かって力強く歌われている。これらのことばの中に、王制復古当時のミルトンの試練の姿が浮き彫りにされ、「忍耐」こそ聖徒たちにとっては修練であることをミルトンは確信していたのである。

ミルトンにとって、神との人格関係の確認が人の忍耐の基盤をなしている。ミルトンの言う「忍耐」とは、ストイックな、自己充足的な徳ではなく、むしろ他者中心的な倫理である。それは、「神の摂理を信じつつ、神の意図を探り、それに従って行動し、その結果は神に委ねんとつとめる」⁽¹⁸⁾ 態度を言うのである。ボームガートナーによればミルトンにとっては、忍耐は無活動とかストイックな無関心のことではない。忍耐の徳に立つキリスト者は、神の摂理に従いつつ、神の意志を探り、それによって行動し、その結果は神に任せるのである。⁽¹⁹⁾

さて、ペリシテ人の役人に促されて、サムソンはダゴンの神の祝いの場へと、まるで屠所へ引かれてゆく小羊のように引き立てられてゆく。彼は「内なる平安」(1334行)と「なにか心をかきたてる動き」(1382行)を感じて、ダゴンの神の家へとおもむく。この衝動は、つまり神の霊の指図である。そしてその神の霊とは、『キリスト教教義論』にみられるミルトン自身の表現によれば、「契約の保証」⁽²⁰⁾ を意味する。従って、それを信じて敵の群れの中へとおもむくサムソンは、まさに「信仰の戦士」(1751行)なのである。サムソンは「忍耐強く、しかし何も恐れることなく」(1623行)、時の来るのを待つ。そして決意の死。コーラスと父マノアは、サムソンの死を「栄光に満ちた」(1660行)、「勝利の死」(1663行)と認め、それを「英雄的」(1710行)とたたえる。父マノアは、息子の死を「英雄的」と表現するが、それも「心配していたように、神から離れることもなく、終わりまで恵み助けて下さる神とともに、すべて行動できたこと」(1718-1720行)を幸いとしているのである。いったん神に棄てられたサムソンが、神との信頼関係を回復できたこと、それが幸いとされている。サムソンの「栄光に満ちた死」は、まさに、「信仰の勝利の死」なのである。『闘技士サムソン』はペリシテ人に対する勝利に関心をもつのではなく、サ

ムソンの信仰の危機に関心をもつと言うアール・マイナーのことばに注目せねばならない。²¹⁾
コーラスは最後に歌う。

All is best, though we oft doubt,
What the unsearchable dispose
Of highest wisdom brings about,
And ever best found in the close. (1745-48)

全ては最善である。最高の知恵の
測りがたいものがもたらすことを
われわれはしばしば疑うが
最後には最善であることがわかる。

ミルトンの神の摂理に対する力強い信頼を表現していることばである。ステッドマンもサムソンの最後の偉業を英雄的な神に受け入れられる行為にしているのは、まさに信仰であることを指摘している。²²⁾

サムソンは誘惑に負け、自らの罪によって自分の力を奪われ、もはや自らの力では何もできないという極限状況におかれて、この世の力に頼れなくなったとき、自らの心の弱さと愚かさを悔い、自認し、苦悩の中から神への「信仰」によって立ちあがり、試練に耐え、「忍耐」の勝利を得たのである。サムソンは、まさに神の力によってこそ「再生」したのであり、『闘技士サムソン』は、神にあるサムソンの「再生」のドラマであると言うことができる。

王政復古からこの作品を書くまでの約10年間のミルトンの生活は決して幸せであったとは言えない。失明、身にせまる危険、政治行動の敗北など、晩年のミルトンにとって、実にさまざまな要素が彼を救い難い挫折感と懐疑と絶望に追いこんだに違いない。しかし、そういった状況の中で、呻吟の末、不屈の魂をもって「信仰」によって立ちあがり、神の力に頼り、最後の攻撃を試みるキリスト者ミルトンの姿を、われわれはこの作品の中に見ることができるのである。ミルトンには失明の暗闇の中で光を見るという経験があった。「失明は全き光である」²³⁾とミルトンは言う。『第二弁護論』の中では、「この闇のおかげで、私は光に包まれるようになるのである」²⁴⁾と語っている。ヨブ型の忍耐を与えられ、暗闇の中に光を見ながら、ミルトンは一段と高い次元に自らを高めることができたのである。

注

- (1) Don M. Wolfe, gen. ed., *Complete Prose Works of John Milton*, Vol. VI (New Haven: Yale University Press, 1973) 461.
- (2) C. P. W., Vol. VI, 461.
- (3) E. M. W. Tillyard, *Studies in Milton* (Chatto & Windus, 1951) 13-14.
- (4) *Christian Doctrine*, C. P. W., Vol. VI, 461.
- (5) Alastair Fowler, ed., with John Carey, *The Poems of John Milton* (London, 1968) 998.
- (6) *Christian Doctrine*, C. P. W., Vol. VI, 490.
- (7) C. P. W., Vol. VI, 490.
- (8) C. P. W., Vol. VI, 492.
- (9) C. P. W., Vol. VI, 475.
- (10) C. P. W., Vol. VI, 476.
- (11) E. M. W. Tillyard, *Milton* (Chatto & Windus, 1966) 272.
- (12) C. P. W., Vol. VI, 476.
- (13) David Daiches, *Milton* (New York, 1966) 232.
- (14) Daiches 232.
- (15) Tillyard, *Milton* 298.
- (16) A. E. Barker, *Milton: Modern Essays in Criticism* (Oxford, 1965) 479-480.
- (17) Barker 478.
- (18) Paul R. Baumgartner, *Milton and Patience* (New York, 1963) 208.
- (19) Baumgartner 208.
- (20) C. P. W., Vol. VI, 513.
- (21) Earl Miner, *The Restoration Mode from Milton to Dryden* (Princeton, 1974) 501.
- (22) Barker 470.
- (23) Don Cameron Allen, *Milton and the Descent to Light* (London, 1970) 627.
- (24) C. P. W., Vol. IV, 590.